

Inclusion

—100年後の世界—

三村 将 Masaru Mimura
日本精神神経学会理事

あなたはとある病院の救急外来に勤務している。2人のCOVID-19感染疑いの患者がほぼ同時に救急車で運ばれてきた。1人は80代の身寄りのないホームレスで、もう1人は40代の家族のいる会社社長である。2人とも同じくらい重症で、患者や設備の状況から言っても、1人を助けようとすれば、もう1人は助けられない。強いて言えば、ホームレスのほうが少し早く到着した。さて、あなたはどちらを助けようとするだろうか。あるいはどのくらい悩むだろうか。これはいわば今日的な「トロッコのジレンマ」ではあるが、ここで問題にしたいのは潜在的な差別、偏見の問題だ。実際に、昨年コロナ禍で医療崩壊が現実となったある国では、どの患者に治療を施し、どの患者を「見殺し」にするか、優先順位を話し合い、高齢の生活困窮者には医療を提供しないことも真剣に議論されたようだ。

日本精神神経学会は本年の代議員選挙で188人中49人(26.1%)の女性代議員が誕生した。前回は150人中10人(6.7%)だから大きな進展である。2020年5月に代議員選挙規則第4条3項が改定され、ここに至るまでの加茂理事をはじめとする男女共同参画推進委員会の強い決意と努力には敬意を表したい¹⁾。著者も理事の1人として、女性代議員の活躍を心から望んでいる。しかし、女性代議員の数が増えることは当然ながら到達目標ではなく、通過点である、というよりむしろ出発点であろう。あえて森喜朗東京オリンピック・パラリンピック組織委員会元会長の発言を例に挙げるまでもなく、日本の社会風土のなかには「男女差別」とか「女性蔑視」といった排他的な姿勢よりは、潜在的に、無意識のうちに女性が社会でプレゼンスを示しにくい土壌が長年にわたって続いているのだと思う。こういう問題が解消されるには100年かかる。

ここで私が強調したいのは、このような問題は性別にとどまらないということだ。性別についてそもそも男女平等というが、近年話題になることが多いLGBTはどうか。台湾の若き天才、デジタル担当政務委員のオードリー・タン(唐鳳)氏は自分がトランスジェンダーであることを公表している³⁾。そういえば、Netflixですごい人気の「梨泰院(イ

テウォン) クラス」でも、料理人マ・ヒョニが隠してきたトランスジェンダーの経歴を悩んだ末に公表して料理コンテストに臨むシーンがあった。日本の社会でもLGBTの人たちの発言力が高まれば、「女性枠」自体も自然消滅するかもしれない。今や左利きが不利であるとする風潮はあまりないかもしれないが、昨年のBlack lives matterに象徴される人種や国籍の問題、宗教の問題、さまざまな疾患、そしてはじめに挙げた年齢など、話は男女に限ったことではない。

マイノリティの人々をどう考えていくかは国家百年の計である。先ほどのオードリー・タン氏はinclusionという表現を使って、すべての人を取り残さない施策が重要であると述べている。たまたま本年2021年は私の教室の創立100周年になる。6月にウェブで記念講演会を行う予定だが、そのなかで若手教室員に「これからの100年」というシンポジウムで好き勝手に話してもらおうこととした。はたして100年後の精神医学はどうなっているのか。それ以前に100年後の日本はどうなっているのか。100年前の人々が今の世界を見たら驚愕するに違いない。もしわれわれが100年後の世界を見たら、もっとはるかに、ヒトの寿命は150年、あるいはそれ以上になっていて、老化という「病氣」自体もなくなっているかもしれない²⁾。百寿者はもはやマイノリティではないだろう。100年後の世界がオール・インクルーシブで、いかなるマイノリティをも後に残さない世界であることを切に願う。

- 1) 加茂登志子：日本精神神経学会代議員女性枠50人に思うこと。精神経誌, 122 (11); 801, 2020
- 2) デビッド・A・シンクレア, マシュー・D・ラプラント著, 梶山あゆみ訳：LIFESPAN (ライフスパン) —老いなき世界—。東洋経済新報社, 東京, 2020
- 3) オードリー・タン：デジタルとAIの未来を語る。プレジデント社, 東京, 2020